

俊成卿女家集末論

—『千五百番百首』と『衛門の督の殿への百首』との比較—

永田 初枝

『俊成卿女家集』は、『新勅撰集』撰集の資料として、定家に提出されるべく天福元年（一二三三）に自撰されたものと考えられている。現在は、百首歌や家集不見の勅撰入集歌などが付け足され、全四部から成るが、自撰部分は、第一部八十三首のみで、それが『俊成卿女家集』の原型であると推測されている。

自撰部分は、巻頭四首、『千五百番百首』十四首、『仙洞五十首』十四首、『北山三十首』二十四首、『衛門の督の殿への百首』二十四首、哀傷歌五首から成り、巻頭の四首と、末尾の哀傷歌五首を除いては、定数歌から数首を選び入れる形で編まれている。その内、百首歌から家集に選ばれたものとして、『千五百番歌合』からの『千五百番百首』と、『為家家百首』からの『衛門の督の殿への百首』がある。

『千五百番百首』は、建仁年間（一二〇〇年初頭）に催された『千五百番歌合』のための百首である。この歌合のために俊成卿女が百首を詠進した建仁元年（一二〇一）は、彼女が内大臣家影供歌合に「新参」の名で列し、初めて公の歌壇にデビューを遂げた、まさにその年であり、それは彼女にとって最も初期の頃の百首歌でもあった。彼女は、その『千五百番歌合』から、春一首、夏二首、秋四首、冬一首、恋六首の十四首を家集に入れているのである。

また、『衛門の督の殿への百首』は、寛喜元年（一二二九）藤原為家によって催された百首である。為家家百首は、二十五人の歌人

が出詠しているが、百首歌の完全な形として残されているのは、家隆と秀能のものがあるにすぎず、俊成卿女の作も、家集に載せられて二十四首しか残されていない。

寛喜元年は、俊成卿女が六十歳の頃であり、その前年には、彼女は嵯峨に隠棲している。その嵯峨隠棲後の歌である『衛門の督の殿への百首』から、俊成卿女は、春四首、夏一首、秋七首、冬三首、恋七首、雑二首の二十四首を家集に入れているのである。

このように、家集には、歌壇に登場したばかりの頃の、彼女の初期の百首である『千五百番百首』と、嵯峨隠棲後の百首である『衛門の督の殿への百首』とが選ばれている。

本稿では、『俊成卿女家集』中の『千五百番百首』と『衛門の督の殿への百首』とを比較し、それを通して、俊成卿女がどのような意識をもって自分の家集に歌を選び出したのかを考察する。

次頁以下に挙げるのが、家集に選じ入れられた『千五百番百首』と『衛門の督の殿への百首』との作である。上段が『千五百番百首』、下段が『衛門の督の殿への百首』である。概ね家集の順に掲げるが、特に歌題や詠み方が似ている歌がある場合は、上・下段で対応させて示す。

『千五百番百首』『衛門の督の殿への百首』、共に一首目は初春の歌である。『千五百番百首』の歌（五番）は、春風が「開けやらぬ谷の戸を吹き過ぎてきたのに対して、『衛門の督の殿への百首』（五番）は、春の雪解けの水が「水閉ぢたる柴の戸」を漏って通ってきたという歌である。「開けやらぬ」に対して「閉ぢたる」、「

千五百番百首の中

春

5 開けやらぬ谷の戸過ぐる春風にまづ誘はるる鶯の声

夏

6 沢水に秋風近し行く螢迷ふ光もかげ乱れつつ

7 岩たたたく谷の下水音分けてむすばぬ袖ぞまだき涼しき

秋

8 葎はふ宿とは分かず秋は来て心尽しに月ぞ洩りくる

10 風吹けばしのに乱るる刈萱も夕は分きて露こぼれけり

11 月見ばと頼めし秋の夜もすがらまた恨めしく搗つ衣かな

9 秋風に外山の鹿は声立てて露吹き結ぶ小野の浅芽生

冬

12 松島や小島が磯に寄る浪の月の水に千鳥鳴くなり

恋

衛門の督の殿への百首

春

55 いかにして氷閉ぢたる柴の戸に漏りくる春の苔の下水

56 武蔵野の草のゆかりに鳴く雉子春は昔の妻ならねども

57 露ながら董菜摘みにとなけれども野を懐かしみ濡るる袖かな

58 風に散る花ゆゑ悲し移りゆく色はむなしと背く世なれど

夏

59 忍ばしな我も昔の夕まぐれ花橋に風は過ぐらむ

秋

60 月かげも思ひあらばと洩り初めて葎の宿に秋は来にけり

61 眺むれば空やは変はる秋の月見し世を映せ袖の涙に

62 今とはとて背くうき世を飯の庵に秋は曇らぬ月のみぞすむ

63 訪へかした浅芽吹き越す秋風に独り砕くる露の枕を

64 見し人も亡きが数添ふ世の中にあらましかばの秋の夕暮れ

65 松風に契りし秋も更けぬとや伏見の里に衣搗つらむ

66 言の葉も枯れゆく小野の浅芽生となれる籬の秋の色かな

冬

67 時雨つつ冬は来にけり秋風の払ひ捨てたる蓬生の宿

68 真木の屋の霰降る夜の夢よりもうき世を覚ませ四方の木枯

69 寒えわたる小島の浪の月かげを氷に映す海女の袖かな

恋

- 13 知らざりきむすばぬ水にかけ見ても袖に雫のかかるものとは
 14 夏衣薄くや人のなりぬらむ空蟬の音に濡るる袖かな
 15 見るほどぞしばし慰む嘆きつつ寝ぬ夜の空の有明の月
 16 清見濁うき寝の浪に宿る夜は月に心のとまるなりけり
 17 思ひ寝の夢の浮橋途絶えて覚むる枕に消ゆる面かけ
 18 漕ぎ離れゆく月かけぞ哀れなる虫明けの松の風の音かな

18 漕ぎ離れゆく月かけぞ哀れなる虫明けの松の風の音かな

谷の戸」に対して「柴の戸」というように、言葉の使い方も対照的である。しかし、それぞれの歌の内容には、明らかに違いが見られる。『千五百番百首』の歌は、「開けやらぬ谷の戸」を吹き過ぎてきた春風に、待っていましたとばかりに先ず真ッ先に誘い出されてさえずる鶯であるよと、その歌は春が来た喜びに満ちているが、『衛門の督の殿への百首』では、一体どのようにして、「水閉ぢたる柴の戸」である我が家に、訪れる者もなくすっかり苦むしてしまつた庭を通して、それでも春を告げる雪解け水が漏ってきたのだらう、と歌っている。「いかにして」と、老いた我が身にも訪れた春を不審に思っているようである。両者の間で、同じ初春の歌を、同じような言葉を用いながら詠んでいても、内容も、そして歌に込められている心も違っているのである。

『衛門の督の殿への百首』56番の歌は、『伊勢物語』の、

- 70 恨めしや思ふ心をかすめてもおぼろに映す春の月かけ
 71 しるべせよ海女の小舟の便りにもそなたの風の跡の白浪
 72 慣れく／＼てあきにあふぎをおく露の色も恨めし闇の月かけ
 73 やすらひに出にしままの天の戸を押しあげ方の月に任せて
 74 干し詫びぬ海女の刈る藻に塩垂れて我からかかる袖のうら浪
 75 思ひ出よ朝倉山の嶺の月よその雲間にかげは絶ゆらむ
 76 朽ちにけり変はる契りの末の松まつに浪越す袖の手枕
 雑
 77 旅衣来つつ慣れても露深き宮城原の秋の月かけ
 78 浪の上の月の行方に漕ぎ別れ漂ふ舟の世の習ひかな

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
 (第四段)

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり
 (第十二段)

などの歌を踏まえて詠まれている。今年の春は、もう昔のようにあなたの妻ではないけれど、今まで共に過ごした武蔵野の草のゆかりを思つて雉子が鳴いている、というのである。続く57番も、露の中をすみれを摘みに行つたからではないけれど、野を懐かしんで濡れる袖であることよ、とある。56番の「武蔵野の草のゆかりに鳴く」、57番の「野を懐かしみ濡るる袖」と、二首ともに懐旧の涙が詠まれているのである。58番の歌は、移ろい散つてしまふ花がむなしと背いた世なのに、風に散る花を見るとやはり悲しい、とある。「移りゆく色はむなし」と、俗世への締念が認められる。

このように、『千五百番百首』の春の歌からは、初春の喜びを詠んだ歌が家集に入れられているが、『衛門の督の殿への百首』の春の歌からは、老いの身にも訪れた春を訝しんでいる歌、「草のゆかり」や「野を懐かし」んで懐旧の涙にくれている歌、「移りゆく色はむなし」と、世を背いた歌など、老いや締念を歌った歌が家集に入れられているのである。

夏の部は、どの歌も表現や用語の点で特に対応しているわけではない。『千五百番百首』の歌（6・7番）は、二首とも、秋風を感じる晩夏の歌である。それに対して『衛門の督の殿への百首』の歌（69番）は花橋を詠んだ歌で、晩夏の歌ではないが、その歌は『古今集』の本歌によって「花橋」「昔」と詠んでいる。『衛門の督の殿への百首』の歌は、夏の歌でも古い、懐旧の歌になっているのである。

『千五百番百首』8番の歌と、『衛門の督の殿への百首』60番の歌は、秋の一首目である。それぞれの歌の本歌として、8番の歌は木のまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋は来にけり

△古今集・秋上・一八四・不知▽

の歌を、そして60番の歌は

やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり

△拾遺集・秋・一四〇・惠慶▽

思ひあらば葎の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつゝも

△伊勢物語第三段▽

の歌を挙げるができる。

「両歌とも、「葎の宿」「月渡る」「秋来」と同じ言葉を使い、同

じ初秋の歌を詠んでいる。「葎が生い茂って、誰の訪れもない宿とはわからないでやって来た秋」（8番）と「葎の宿を哀れに思うのであれば、せめて月影だけでも訪れをしようとして来た秋」（60番）と、どちらも、荒れ果てた住居と秋の月のやわらかな光とが詠まれているが、『拾遺集』の歌を本歌としている60番の歌は、葎が生い茂る宿の寂しさと、人の訪れがないかわりに月が訪れるという寂しさのために、8番の歌からは感じるこのできない「古い」というものを感じるのである。

61番の歌には、無常感が溢れている。また、「見し世を映せ袖の涙に」と、懐旧の涙が詠まれており、「眺むれば空やは変はる」と反語で詠んでいるその裏には、変わってしまったのはわが身であるという意が込められている。老いの無常を詠んだ歌なのである。62番の歌は、「今はとて背くうき世」と、俗世を背いたことを詠んだ歌である。63番の歌では、誰も訪れてはくれず、一人涙しているこの身を訪れて欲しいと訴えている。一首中のどこにも、特に老いを思わせる言葉はないが、誰の訪れもない老いの身を詠んだ歌とみることもできる詠みぶりである。64番の歌は、「見し人も亡きが数添ふ」と、老いを詠んでいる。

『千五百番百首』11番の歌と、『衛門の督の殿への百首』65番の歌とは、共に掃衣の歌である。「月が出たならばやって来よう頼みにさせた秋の一晚中を待ち続けた」11番の歌と、「待っているからと約束をした、その秋が更けてしまった」65番の歌とを比べると、月が出たならきつと来てくれるだろうと信じて一夜ずつを待っていた頃と、もう一夜ずつを待つ期待もなく一秋中を待ち続けている、

という歌との対比が見られる。

『千五百番百首』9番の歌と、『衛門の督の殿への百首』66番の歌とは、共に「小野の浅芽生」を詠んだ歌だが、9番では「外山の鹿は声たて」ているのに対し、「言の葉も枯れゆく」66番歌には、無言の寂しい秋を送っている老いの身が詠まれている。

冬の部では、『千五百番百首』12番と、『衛門の督の殿への百首』69番とは、「小島の浪」を詠んでいる。どちらも、波に映る月を水に見立てて、冴えた美しさを表現しているが、『衛門の督の殿への百首』は、その月をさらに「海女の袖の涙」に宿らせて、冴えくとした美に艶を添えている。

以上、俊成卿女が家集に選じ入れた『千五百番百首』と『衛門の督の殿への百首』の季の部を見てきたが、『衛門の督の殿への百首』には、老いを詠み込んだ歌が多く見られるのに対し、『千五百番百首』には、そのような歌がないこと、また、歌壇に登場したばかりの頃に詠んだ『千五百番百首』と、それから約三十年の間、歌人としての経験を積んだ『衛門の督の殿への百首』とは、同じ言葉を使って歌を詠んでいても、一首から詠み取れる歌の趣や重さが違うということがわかるのである。

次に、恋の部を見てみる。

家集中の『千五百番百首』恋の部の一首目(13番)は、まだ手に結ぶことさえしていない水に映った面影を恋慕って涙する初恋の歌である。続く14番の歌では、恋人の愛情が薄れてしまったのではないかという危具を「薄くや人のなりぬらむ」という疑問で表現して

いる。13番に見られた初恋の涙が、恋人の愛情を疑う疑問の涙に転じている。15番の歌は、恋人が訪れず、嘆きながら寝た夜の有明の月を慰めとして見ると、14番での疑問が嘆きに変わり、続く16番の歌とともに、月に慰めを求める心が詠まれている。17番は、恋人を思いながら寝て夢を見た、その夢の中で恋人と自分とをつないでいた浮橋が途絶えてしまい、目覚めると同時に恋人の面影までがはかなく消えてしまったという歌である。「途絶えして」「消ゆる面影」と、恋の終焉を暗示しているかのような歌である。最後の18番の歌は、海上で、月に漕ぎ離れてゆく歌である。15番、16番の歌では、月は恋の嘆きを慰めてくれるものとして詠まれていた。しかし、17番の歌で恋の終焉を暗示した後の18番の歌は、その月に「漕ぎ離れ」てゆくのである。

このように、家集中『千五百番百首』の恋の部では、初恋↓疑問↓嘆き↓恋の終焉と、恋の進行にしたがって歌が詠まれているのである。

『衛門の督の殿への百首』でも、同様に、恋の進行に従って歌が詠まれている。

一首目(70番)は、恋心をほのめかせても、相手の返事が、春の朧月の光のようにぼんやりとしか返ってこないことを「恨めしや」と言っている。「思ふ心をかすめ」る初恋の歌である。続く71番では、「海女の小舟」のように、独りあてもなく漂っている自分に、せめて男が去った後に立つ白波の跡を道しるべとして残して欲しいと訴えている。72番では、独り寝の涙を照らす、闇に射す月の光をさえ「恨めし」と言い、73番では、明け方出ていったまま、その後

訪れない男の代わりに、明け方の月の光がその扉から射し込むに任せていると詠んでいる。続いて、74番では恨みの涙を流し、75番では「思ひ出よ」と男に訴えるが、76番に至って、ついに「いつまでも」と誓った約束も変わり、手枕にした自分の袖が涙で朽ちてしまうのである。朽ちてしまうのは袖ばかりではあるまい。初句の「朽ちにけり」は、恋の終わりを暗示しているかのようである。このように、『衛門の督の殿への百首』恋の部も、『千五百番百首』同様、初恋から、男に忘れられていく悲しみ、独り寝の嘆き、そして恋の終わりと配されている。但し、初恋から恋の終わりへと、同じように恋が進行している『千五百番百首』の恋と『衛門の督の殿への百首』の恋とは、まったく同等、同質の歌が配されているわけではない。

『千五百番百首』での初恋(13番)は、「むすばぬ水に影」を見ただけで、恋の涙で袖を濡らしてしまう。また、そのような自分に「知らざりき」と、新鮮な驚きを感じている。それに対して、『衛門の督の殿への百首』(70番)では、「思ふ心をかすめ」という手段をも、返事をぼやかす男に「恨めしや」と恨みをかけることも知っているのである。また、『衛門の督の殿への百首』では、だんだん疎遠になる男に対して、「しるべせよ」(71番)、「思ひ出よ」(75番)と、二度も訴えをしている。どちらも命令形初句切れの、非常に強い言い方である。まさに必死の思いを訴えている。このような訴えは、『千五百番百首』には見えない。『千五百番百首』での「女」は、遠ざかる男をどうすることもできず、ただ悲しみに身を任せるだけなのである。

このように、『千五百番百首』の恋と『衛門の督の殿への百首』

の恋とでは、表現や訴え方に違いがある。特に、それぞれの恋の歌を詠み比べてみて興味深いことは、「月」の読み方の差異である。

『千五百番百首』では、「見る程ぞしばし慰む」(75番)「月に心のとまる」(76番)というように、「月」は嘆きを癒してくれるものであった。しかし、『衛門の督の殿への百首』72番歌は、月に照らされて輝く涙の色も恨めしい、と詠まれている。これは、孤闇に月の光など射さずともよい、という意味に解釈される。つまり、この歌の「女」には月の慰めなどいらないのである。「月」は確かに人の心を慰めてくれるかも知れないが、『衛門の督の殿への百首』を詠んだ時の俊成卿女には、いくら慰められても、結局それは何の解決にもならないのだということが骨身にしみてわかっていたのである。

俊成卿女の人生経験の違いとでもいうべきものであろうが、恋の歌においても、『千五百番百首』を詠んだ時の俊成卿女と、『衛門の督の殿への百首』を詠んでいる俊成卿女との間に、歌の表現や訴え方に違いがあるのである。

両百首歌の最終の歌は、海上で月に漕ぎ別れていく歌である。だんだん離れていく月の光を「哀れ」と思う『千五百番百首』の18番の歌に対して、『衛門の督の殿への百首』の78番歌は、我が身を「漂ふ舟」になぞらえ、「浪の上の月影に漕ぎ別れて漂」っている状態を「世の習ひ」と言っている。彼女は、結婚後数年にして夫通具と別居した。78番歌は、夫と別れた後、歌人として独りで生きてきた俊成卿女の、自分の一生を振り返っての感想なのかもしれない。

以上、『俊成卿女家集』中の『千五百番百首』と『衛門の督の殿への百首』とを比較してみた。両者の間には、配列の面でも、各歌の歌の題材の面でも、共通性が認められた。それらの百首をみていくと、俊成卿女が各百首からの撰歌に際し、それぞれの百首を対比させるよう意識したことは間違いないさそうである。しかも、その対比は、単に歌の題材や詠み方が似ているという類似歌の対比にとどまらず、同じ題材、同じような詠み方をしている歌を、俊成卿女が歌壇に登場したばかりの若い頃に詠んだ歌と、隠棲後の「古い」を意識した歌とで意識的に対比させて配するというものであった。

『俊成卿女家集』中の『千五百番百首』、『衛門の督の殿への百首』の二つの百首歌から選り入れた歌からは、『千五百番百首』を詠んだ初期の頃の自分の歌と、出家・隠棲後の『衛門の督の殿への百首』の歌との両方を対比させて家集を編もう、という俊成卿女の家集自撰時の意図が見えるのである。

それは、森本氏の言われるとおり、『俊成卿女家集』における「古えと今との対比」の一つの表れでもある。その「古え」と「今」との対比も、単なる時間の対比ではなく、俊成卿女の心情面での「古え」と「今」、つまり、若く華やいでいた「古え」に対する「老い」を認識した「今」という意図を認めても、大きな誤りにはなるまい。

〔注〕

- (1) 森本元子氏著『俊成卿女の研究』（昭和五十一年十一月、桜楓社刊）第七章 俊成卿女家集の形態と成立。
- (2) 同右。
- (3) 『俊成卿女の研究』第八章 俊成卿女家集論。

(4) 『俊成卿女家集』の底本は、森本元子氏編著『俊成卿女全歌集』（昭和四十一年五月 武蔵野書院刊）による。なお、本稿で引用した歌には、適宜漢字をあてた。

(5) 引用の『伊勢物語』は、『日本古典文学大系』による。

(6) (7) 引用の『古今集』『拾遺集』は、『新編国歌大観』による。

(8) 『千五百番百首』18番の歌は、『千五百番歌合』では雑の部立てになっているが、『俊成卿女家集』では、恋の部に配きられている。

(9) 『俊成卿女の研究』第八章 俊成卿女家集論。

本稿は、平成元年度筑波大学教育研究科修士論文の一部である。修士論文を書くにあたり、貴重な御助言をいただいた諸先生方に厚くお礼を申し上げたい。

（筑波大学文芸・言語研究科研究生）